

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title | 獨語の南北：論説 |
| Author(s) | 桑野，禮治 |
| Citation | 龍南會雜誌， 9 6： 1 4 - 2 2 |
| Issue date | 1902-12-21 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/5410 |
| Right | |

は道春春齋の靈林家の學果して衰弊仕るゝ嘆息可仕候

十四

この他室鳩巢新助の雜話を引いて山崎の不孝の狀態を曝露し又た鳩巢が人に話した話を引き「君子の道は温厚を貴ぶに彼學徒は嚴肅を主として温厚の様子なし」と云ひ或は「神道を交ふるは王陽明が佛を交へて説くに異ならず」と批難し或は嘗て厄介に預れる野牛伯耆と絶交せりなご盛に山崎を攻撃してある

既に不偏狹主義を取りて。しかも山崎氏を攻撃するは聊か矛盾の嫌ひがあるやうである。(未完)

獨語の南北

講師桑野禮治

○「言語ハ社會ノ產物ナリ」と道破せる、伯林大學の漢學教授ゲオルグ・フォン・デル・ガベレンツの格言にして、正鵠を失せざる以上は、社會の狀態が、言語に及ばず影響の尠少ならざること、固より疑を容れず。而して、社會が外界に左右せらるゝ關係に就ては、キコ、モンテスキュー以來の學說、既に確乎たるものあり。試に、大塊を劃して東西となし、その人文開達に關する地理的影響を一瞥せんか。二千の霜星を前にして、崑崙山東、黃海以西、いはゆる「中華」の思想界は、「魯論二十篇」に騁魯の流風を認め、「道德五千言」に荆楚の思潮を詳にして、兩者の旗幟を鮮明ならしめたるもの。この原因は「南橋」「北枳」の如き風土上、結果に負ふ所少からず。降りて六朝南北、なほ「暗中日を窺ひ」「顯處月を認む」るを以て、相互の氣風を品題し、終に「趙宋」眉山の蘇軾に及び、「簡約にして精華なるもの」、「深蕪にして枝葉なるなるもの」と評判せること、單に文人の常談として、冷眼視すべきにあらず。所詮は、方今なほ各自の表出に涇渭を分ちて、官話に南北を現じ、入

聲濁音の有無が、その特徴たること、注意を要する所にあらずとせんや。亦身毒、恒河の兩江、灌注する千里の方域に、カヒラプスツの王子、一起して平等主義を鼓吹せしより、多時ならずして、その福音が四邊に傳播するに従ひ、「戒律」と呼び、「禪定」と云ひ、「彌陀」と稱し、「觀音」と號し、「梵」「巴」兩語の經文成り、大小二乗の差別起りしも、要するに地理的南北の關係を以て、觀察し得べきもの多し。遠くヘルラスの往昔を回顧して、ラコニア地方の枯淡的山景が、「ドリア」種族の「粗野」と、小亞細亞沿岸の平穩的風物が、「イオニア」人民の閑雅と兩立するは、如何なる原因に基くかとの問題に對しては、吾人終にオストホフ氏に左袒せざるを得ず。其言に云く「人類が、凡百の物理的機關の構成に於ける如く、その發聲機關に於ても、亦外界殊に氣候の影響、文化の關係等の勢力の及ぶ所少からず。連山と平原との氣候の差異は、各々の土地に居住する人民の肺臟、胸腔、喉頭等を特別ならしむること明白の事實なれども、言語學上にて全樣或は類似的の氣候的、並に文化的關係が、到處に全樣若くは類似的の音韻上傾向を、國語若くは方言に發現する事實は、從來なほ確認せられしこと多からざりき。吾人は敢て茲に十分なる引證を以て、本問を推演する餘裕なしと雖、唯胸裡に落想せる事項を、聊開陳すべし。此に關して、例之カウカゾス地方には、「印歐」種族に屬するアルメニア人、イラン人等と、非「印歐」人種なるゲオルギア人其他のものと、かく起原を全うせざる隣接の各種族にして、殆ど全一の音韻系統を有せるが如き事實には、尤着眼せざるべからず。又軌近の研究が、各方面に亘りて證明する如く、全一の國語の内部に於ても、个别上方言に連續的變化の行はるゝを見る。」と、之を外にして歐土の近世も、露語には「大」「小」相伴ひ、佛語には「オック」と、「ウイ」と對立せしこと復贅辨の喋々を要せざるべきなり。

○是に於て之を獨語に視る、亦南北の徑庭判然として、往昔アーヘンよりアッシエルスレーメンに亘り區劃とせるもの、今やマインの河流、之に代りて界線の位置を占むるに至れり。地勢已に南部はアルペンの攢峯層巒、いはゆる「上國」を起し、北部は即ち東海、北海の平沙淺汀、いはゆる「低國」を成すが如く、南人は感情と想像とを豊富ならしめ、北人は智力と意志とを發達せしむるに及びぬ。前者はラインの中流より、ドーナウの沿岸に跨る麗日和風に鎔冶せられて、ハイドンの律呂となり、ヅューレルの丹青となり、シルレルの院本となり木刻、銅鑄、活版の發明と化し、後者は彼の歌謠を解せざるフリースラントの寒光短晷を擧げて、全豹を窺ひうるが如く、ヤーンの牀育となり、ヒスマルクの經綸となり、モルトケの鈴韜となり、獨立戰爭、關稅全盟の淵源と變せり。

○かゝる影響は、騷人韵士の神味、風調に就ても驗しうべく、ツュービンゲンのウーラントは、ハプスブルク朝に葵誠を固守し、クエドリントブルヒのクロプシトツクはトイトブルヒ役の志士を讚美せり。若夫ゲーテの才華レシングの氣魄に至りては、殊に詳説を要すべきもの存す。イザール川畔の古都には、「フリーゲンデブレツテル」の文學時報嗜好に投じ、シプレー河涯の新京には「クラツデルラツチ」の政治新誌喝采を博す。其理解しうべきにはあらざるか。彼は文學史上の三金世たる紀元六百年、千二百年、千八百年に各與りて力あり。加之最後に方りては、所謂獨逸の「アレキサンドリア」朝に、ゲーテ、シルレル、キーラントの三明星を發現せしめしを以て證すべく、此が第十三世紀の以前に當り、「ザクゼン、シビーゲル」の法律を以て、已に散文の典型を老成せしに訪まり、輓近獨逸、否むしろ宇内の壇坫に雄視する、ニープー、シロツセル、ランケの三長史を輩出せしめしを以て察しうべし。彼の維新主義の潮流が、歐洲全土に澎湃せるに際して、ライマールス、

ンデルスゾトン、ニコライ等が、牛耳を執りつゝ新思奇想の普及に努めたるに反し、アウエルバハ、ゴットヘルフ、アンツエングルーベル等は、退隱に托して水村山郭の寫實に従ひたり。かく甲は天下國家に着眼し、乙は自然愛情に注目し、各自の好尚の販する所、信仰に及びても、質素簡約なる新教と、裝飾絢爛たる舊教とは、よく相互の歸依を表出して餘蘊なし。是故に「カトリク」的の片言が、北人に對する恫喝は、宛として「プロイセン」化との一語が、南人に於ける脅迫なるを想ふべし。

○更に進みて、音韻の變遷、單語の轉化を觀察するに、上國常に優位を占め、官話と標し、雅言と目し、低國は敢て土音と貶し、俗語と蔑せらるゝには至らざるも、竟に受動の状態なるを免れず。卽ちはゆる轉音^{ラートエールンク}、*u*, *iu* (*ue*) の *ei*, *au*, *eu* に於ける分支の如きも、西南に濫觴せるものにして *suebi* の *Schwalben* に遷れる事、第四世紀に起り、第九世紀には、之を低國調の傑作「ヘリアント」の唱譚^{ハムス}につき索めうべし。又 *speculum* の *spiegel* (*Spiegel*) に於ける、*schola* の *schule* (*Schule*) に於ける、皆此類なり。又單語の曲變に關しても、上國は「拉典」系統の諸語に彷彿として、動詞の用法につき、主動式已然段にむしる助辭を愛する極、*da sagte er* に代ゆるは、*da hat er gesagt* を以てするに至り。且已然段の可能法に *wuerde* を借りて側叙する *ich saenge schoen* を文るに *ich wuerde schoen singen* を以てする類、殊に乏しからず。尙陪詞の曲變に關しても、クロブシツク、ピルゲル等の北派が、*gutes Mutes* の硬形を固持せしに反し、ゲーテ、シルレル等の南派は、*guten Muts* の軟式を主張して怪しむ。乃 *waffe*, *Staffel* の *wappen*, *Stapel* の *lachen*, *nachen* の *laken*, *backeln* となり、*weissenburg*, *Altenburg* の *wit tenberg*, *Oldenburg* の *alt* となり、豈類推しむるものぞ。

て目しうべけんや。是故に傳來の外語の如き、彼處に在りては Jaenner, Kesten と速に化し、此處に於ては Janur, Kastanen たること今猶爾り。Nikolaus, Bartholomaeus の人名すら、音調の抑揚に伴ひ、彼は Nickel, Barthel と稱し、此は Klaus, Mewes と稱す。況して Altar, pastor の物名に及びては、前者は頭綴を主とし、後者は尾綴を重んずること、亦宜なる哉。

○然りと雖、茲に少しく觀察の方面を變換して、仔細に熟視すれば、隨意に彼を恣ひ、此に與ふといふが如く、輕しく軒輊しうべきものならざることを悟了す。文宣聖のいはゆる「北方強」てふもの意志の堅固に加ふるに判斷の精確を補ふものとすれば、則低國の謂なり。幾回か南方に淵源せる音韵轉化の潮勢、已にザクセンに入るや、直に停滯して復流れず。すなはち「高獨」の方言、葛裘を更ふること半百にして流轉するもの、何ぞ「低獨」の千載にして不易なるものと、比肩しうべけんや、と千六百五十一年の以前に放言せしロシトツクのラウレムベルヒをして、今日なほ名を成さしむる所以、ますく昭著なるを覺ゆ。要するに、低國は固より主唱の任に堪へず、創業の地にあらず、原動の勢を有せずと雖、その外方に對する應化、整齊、守成の技倆に就ては、敢て三舍を避くるにあらず。却て一步を進め、洵に楚材晉用の特色を發揮するものなること、吾人の看過しぬざる所なり。乃ち「神曲」^{ヂヂリコメヂヤ}と左提し、「失苑」^{バライスロスト}と右挈せる歴代の妙什「メシアデ」の作者にして、その宿構、腹案に卅年を費せる餘暇、なほ語法の研究に孜孜として貢獻せし所尠少なからざるに及びては、周到の才力、兼備の學識は、此点に於て「ファウスト」の作家「ブルレンシュタイン」の著者も、竟に一籌を輸せざるをぬざるべし。加之ゴットシエド、アデルングの如き、文典家の錚々たるもの、亦多く北地に出身するを知らば、轉前言の左券たるをぬんか。

○此より、吾人は言語上、表出の感情的部分を一顧せん。机上一卷の風土記は、這般の消息に關して、南北の人士が田園の趣味を看取せしむるに餘あり。南莊は多く花卉を點綴し、半酣の夢魂をして香しからしめ、北墅は却て古松、老杉ひしる歲寒の晩節を樂しむ風あり。こは移して以て、言語の差等を品するに足る。一言もて之を蔽へば、重音の頻數に存ずといふべく、更に細説を費せば、發音の輕重、語調の緩急等につき、その異同は明晰なるべし。例之バイエルンの長語、ブランドンブルヒの短調、何ぞ對比の妙を極むるや。乃上國に在りては、風土の靜穩爾らしめて、酒肆の招牌、市井の談話にも、縮語を認むること頗多く、人名に冠詞を加へ、弁論に挿語を交ふるが如きは、他に其匹稀なる所。低國に至れば、地味の確確はおのづから人心を緊肅ならしめしこと、方にstarr, steif, straff 若くはfloht, flink, knapp の如き單語の由來する所を推して、察しうべし。今吾人が字書を檢し、語彙を記するに際し、單に器械的に背誦するを以て足れりとせば、固より論なきのみ。而も一回、gentleman, home の英語に於ける、causerie, galant の佛語に於ける如く、之を外語に翻すべからざるを見て、その内容を鄭重に研究する必要起り、その系統を追ひ、語源に溯り、譬へば國語に於て「富士」、若狹等が「蝦」語に屬し、「阿伽」「馬鹿」等が「梵」語に基きしことを悟らば、茲に益單語につき、その語源上探討の興味を覺ゆるに及ぶべし。是に於て、上國の南方には山語多く、低國の北部には海語夥しき理を考ふること、閑中の一適を目すべけんや。彼より Alp, Föhn, Vetscher, Matte, Senne を學び、此より Bucht, weich, Elbe, Kahn, Ufer を傳へたること、抑故あり。

○南北の大脉、已に此の如き差異ありとせば、更に个别の一部に及びても、かゝる傾向を辨認しうることを、實に理の觀易き所なるべし。彼の判斷の確實もて、古今の學界を震撼せる王山の「無

上^ト命^シ法^ムも、誰かプロイセンの特質たる本分の觀念が、嚴肅主義の權化にあらざるを知らぬや。又いはゆる立議の卓拔にて、一世の論壇を風靡せし馬^{スワ}苑^{ガルト}の「辨證論系」も、安ぞシワーベンの殊微なる超然、高擧に由來せる沈思、冥想の意匠ならざるをいんや。又神學の範圍に於ても、ハルムスの剛毅、堅忍は、ニーデルザクゼンの出なるを明にし、ブルームルハルトの溫和、恬靜は、グエルトムベルグの産なるを顯せり。尙詞人、文士に於けるも、グリルバルツエルの全集は、埃京人士の本色を發揮して毫も憾なく、シトルムの小品は、北獨の風情を摸寫して眞に迫れり。或はシェンエルの歌謠に於ける、フオンタネの傳奇に於ける、若くはゲルレルトの乾燥に陷れる、シチフトルの細碎を病める、ゾイメの奇警、峭拔なる、リヒテルの清圓、娟秀なる、皆是なり。更に「ハムブルヒ劇論」もて藝苑を傾動し、ルーテル以後の一人と許さるゝ、カーメンツのレシングと「ワアウスト」の絶作もてシェークスピアの富贍を睥睨する、フランクフルトのゲーテとに及びては、特別の月旦に供せざるをいず。

○茲に、カーメンツとフランクフルトとにつき、殊に品藻を費やさなどいふも、ろは敢て詞壇の泰斗、藝苑の木鐸として、當時の形勢を考へ、後世の影響を究めんといふにはあらず。唯本題に必要なる高低の方言、ろの差異の基く所、畢竟は南北の氣風が、この二者の性格に於て、判然と代表を見るに足るが故に、少しく各自の面目の片羽を描出せんとするに過ぎず。若この全幅の照相に至りては、一部の完冊、なほ有餘を覺えず。十年の研究、かつ不足に苦しむべし。抑荒蕪の筆墨は、其任に當り難きを奈何せん。乃爪鱗を畧繪して、全龍を想見せしむること、亦全く止むをいざるに出づ。前々世紀の末葉、彼のクリンゲル氏の目せる狂亂時代に際して、カーメンツとフランクフルト

ルトどには、約廿年を隔つる先輩と後進とを認むべく、從つて後者が、前者に多く受けしことは、
 對話篇の自白に徴して明なり。然りと雖、エルステルの風光と、マインの景色とは、春花、秋葉、
 其觀を別にして、竟に風馬牛相及ばず。いはゆる「天碧にして、橙黄なる」長靴半島の雲物に臨みて
 も、前者は冷然、淡如として毫も視聽を傾動することなく、寧ミラノの文庫に、正史の逸事を探り、
 舊典の闕文を補ひて、南征の徒ならざりしを樂しみ、後者は好奇、玩古に日もこれ足らざ。『ワチカ』
 の寺觀に、名工の神腕を鑒し、鴻匠の鬼斧を賞して、宿望の報あるを喜こべり。愛玩、好尚已に此
 の如しとせば、その精神の容姿たり、内界の反映たる言文に、表出する所殆想像しうべきにはあら
 ざるか。彼は青帝和を施ける鳥語、花影の駘蕩も、その「劇論」の所説に従へば、構思、運想には涓
 埃の裨補なく、一に自己に反求せざるべからず。但比方、喻語に至りては、常に好みて之を用ひし
 も、亦等しく讀書、記問に因ること多く、融會、拈出しうるもの少し。此は源泉混混として清す能は
 ず、涸み匡きもの、自家の比してサンチ、パンサに抗衡しうとなすもの、八面玲瓏、眞个に流露の
 痕跡を認むるに由なき所なり。

○マインの詞宗は、和平、快活なるが故に、その製作も閑雅、婉美に、加ふるに宛轉、流暢を以て
 目するも、失當ならず。蓋獨語を筆して、神髓を得たるに庶幾きものならんか。その描寫の躍如と
 して、その格調の緩和なる、誠に當世に冠絶せり。是を以て、「叙事」には首尾を合串して、連環の
 端なきを疑はしめ、「抒情」には意趣纏綿として、尤香奩の一脉に長を示し、加之戯曲さへ、且この
 色彩を塗抹せるを見る。又エルステルの碩學は、剛毅、木訥なるを以て岸然自立し、一个と雖輕し
 く取予せず。いはゆる「快辭激越」より善きはなしと稱するを見て、吾人は此點に於ても、ルトステルは

前度のレシングにして、レシングは再世のルーテルたる偶合の奇に、撃節せざるをるぞ。而して陪詞の層出を忌み、對句の重見を避け、最級の使用を限れるは、多とするに足り、更に語調は簡潔に寓する外、毫も意を以て言を枉げずと號するもの、實にその抱負に矛盾せず。よく質素、朴茂の内、をのづから明晰、犀利を存する手腕は、誠に文苑の射鵰たるに耻ぢず。今二者の淵源を、總べて之れを通覽するに、ゲーテは希臘の文を領し、レシングは羅馬の質を受け、甲は竜動の花を愛し、乙は巴里の月を賞し、彼は客觀的に對應し、此は主觀的に發揮し、一は境遇を詩化し、一は理想を現實す。筆して此に至り「地利」「人和」の套語嘗て耳朶にせしもの、今眼前に南北に分たれ、海陸に限られ、寒煖に化せらるるを目撃して「國語は國民の自然的生活に基くこと、信仰、風習、法律、俗謡の如く爾」と、クルチウスの金言に、三歎せざらんと欲するも能はざるを覺ゆ。

○終に臨み、一般讀者に向ひては本稿の材料、主としてワイゼ博士に仰ぐ所少からざるを告白し、小島教授に對しては、友誼上扶助を辱うせしを鳴謝すと云爾

